

< 参考資料 >

1998年11月12日

ディオバン[®]が、アンジオテンシン 受容体拮抗薬として 初めて左心室肥大退縮を証明

アンジオテンシン 受容体拮抗薬として、初めてディオバン[®]（一般名：バルサルタン。日本ではノバルティス ファーマ株式会社が、高血圧症治療薬として申請中）により、ヒトの左心室肥大（LVH）を退縮させることが証明され、*Circulation* の11月10日号で発表されました。

これは、ドイツで実施されたディオバンと β -遮断剤アテノロールの二重盲検比較試験の結果として報告されたもので、ディオバン投与により、左心室肥大の指標である左心室マス・インデックス（LVMI）が大幅に減少しました。

この試験は心エコーで、心肥大が認められた高血圧患者69例を対象とし、ディオバン80～160mg/日またはアテノロール50～100mg/日を投与して8ヶ月間観察したものです。患者は、3ヶ月後に2回目の心臓超音波検査を受け、そして試験終了時に3回目の検査を受けました。58人の患者がLVMI分析のための検査を受けましたが、内29人がディオバン、同じく29人がアテノロール・グループの患者でした。

ディオバンを用いた長期的な治療は、治療開始時に比べ、高血圧患者のLVHを有意に減らす結果となりました（ $p < 0.0001$ ）。降圧作用では、ディオバンとアテノロールは、同等の効果があるものの、ディオバンを用いた患者の平均LVMI減少量は、アテノロールを用いた患者の10 g/m²（治療開始時に比べ8%減）に比べ、21 g/m²（治療開始時に比べ17%減）と大きな減少を示しました。

フランクフルト大学トルマン教授（Dr. P. Thurmman）は、「今まで動物実験でしか確認されていなかったアンジオテンシン 受容体拮抗薬の左心室肥大退縮効果がディオバンによって、初めて臨床的に証明されたことは注目に値する」と述べています。AT₁受容体選択性が高いディオバンは、AT₁受容体の遮断により、心肥大を抑制するのではないかとこのこれまでの仮説を証明したことになります。

この結果は、現在進行中の35,000例を超えるディオバンを用いた心血管系疾患予防と死亡率の改善を目的とした数々の大規模試験のさきがけとなるものです。海外では、

- 1) Ca拮抗薬アムロジピンを対照薬としたVALUE試験
- 2) 慢性心不全患者を対象としたVal-HeFT試験
- 3) 心筋梗塞後の患者を対象としたVALIANT試験
- 4) 糖尿病患者を対象としたABCD-2V試験

などが進行中で、アンジオテンシン 受容体拮抗薬が、高血圧治療のファーストチョイスにとどまらず、生命予後改善効果を持つものとして期待されています。